

アニメで知る心の世界

こもれび心の診療所 羅田 享

今回扱うアニメ作品：君に届け

今回のテーマ

恋愛について考える

I. 恋愛は転移からはじまる

II. 恋愛は人との距離を縮めること

III. 恋愛はエディプス葛藤にむきあうこと

I. 恋愛は転移からはじまる

1. 転移とは？

精神分析の創始者であるフロイト（Freud,S）がクライアントの治療を通して発見した現象で、過去の重要な対人関係で形成された感情、態度、期待、行動パターンを、現在の対人関係に無意識的に転写すること。

具体的には以下のような現象として現れる

① 過去の感情の再現

- 例えば、厳格な父親に対する感情を、現在の上司に対して無意識に向けてしまう

②行動パターンの反復

- 子供時代に形成された対人関係のパターンを、現在の人間関係でも繰り返してしまう

③期待の投影

- 過去の重要な他者（親など）への期待を、現在の対人関係に投影する

転移には主に2つのタイプがある

- 陽性転移：好意的な感情や期待を投影する

- 陰性転移：否定的な感情や不信感を投影する

転移は病的な現象ではなく、むしろ人間の心理として自然な現象である。日常生活のあらゆる対人関係において、程度の差こそあれ転移は生じていると考えられている。

3. 出会いは転移から

主人公である黒沼爽子は純粋な性格で、前向きかつ努力家である。また、人の役に立てる事を喜びとしており、周囲と仲良くしようという性格である。一方で小学時代から真っ黒な長髪と青白い肌という陰気な容姿から同級生に「貞子」と間違えられ、それからそのあだ名が定着し、周囲から恐れられる。しかし周囲の恐れはある意味、自身の心の投影の様にも感じられる。

つまり、爽子は周囲に溶け込みたい思いがある一方で周囲と関わることを恐れ、その中で内向的で壁（自己愛的殻）を作り、葛藤している様に感じられる。

そこに周囲と関わるきっかけを作ってくれたのが、風早翔太である。

1) 風早翔太との出会い

風早翔太：爽やか・気さくな人柄で男女を問わず人気者のような存在。爽子曰く「みんな風早くんが集まって行って　そこから輪ができていくような私とは正反対の男の子」

主人公の黒沼爽子は、上記の様に風早くんのことを思っているが、周囲の人々と違い、受け入れてもらったことで憧れの念（陽性感情）を抱いているが、この時点で爽子は風早くんに対して陽性転移が起きていると考えられる。

2) 風早翔太との会話

爽子が友達と風早君の噂をしていた時に偶然風早くん本人に聞かれてしまい、爽子が自分が「ほめ言葉」と本音を言った時に、風早くんが受け止めてくれ、爽子をフルネームで呼んだシーン

爽子「私…、…誤解が解けたのって…初めてかもしれない」

風早「…ちゃんと喋ったら、ちゃんと自分の気持ちいったじゃん」

そこで爽子の気持ちが非常に揺れ動き、今まで爽子が感じたことのない色々な感情が動き出す。（しかしこのとき風早くんの「俺そんな別にさわやかじゃねーよ」といったりするありのままの姿を爽子は見ていない気がする。）

爽子は風早君（爽子のなかで理想的に加工された対象に変わっているが）という良い対象を取り入れる中で他者との関わりを持とうとし始める。

そして爽子は同じクラスの矢野あやのと吉田千鶴と関わり、自分の思いを伝える。

3) 矢野あやのと吉田千鶴と関わり

あやのと千鶴の二人が肝試しをめぐって爽子の話題をしていたときに爽子はお化け役をやらせて欲しいと伝え、「みんなと仲良くしたくて　だけど　そのために　いやいや　やっているわけじゃなくて」という。その言葉にあやのと千鶴は協力する。そこで爽子はわかってもらえた気がして風早くんを感謝する。

わかってもらえた……！！ 私の気持ち

ほんの少しだけど かわれた気がする 風早くんのおかげだよ

→その後、爽子は二人と交友関係を形成していく（交友関係にいたるまでの揺れ動きは後述）。

また、今後、対峙するであろう胡桃沢 梅（くるみちゃん）とも関わるようになる。

→憧れの存在である風早くんに後押しされる中で、爽子は徐々に周囲の人たちとの関わりを持っていくようになっていく。これは風早くんが爽子にとっての良い対象となり、これまで内向的で壁を作ってきた爽子が周囲の世界に関わろうとするきっかけを作り出している。それは風早くんという存在（これは実際の風早くんではなく爽子の心のなかで抱く風早くん像であり、彼女の内的対象）が爽子にとって心の支えになっている。つまり彼女にとって風早くんは良い対象となり外界に触れていくきっかけを作り出している。

しかしその過程での爽子と風早くんの距離は、紆余曲折を繰り返す、一筋縄ではいかない。なぜなら、主体が対象と距離を縮めていくことは、様々な情緒を呼び起こし、怖くなり、引き返したい気持ちに駆られてしまうからである。しかし、やはり距離を縮めたいという気持ちが強く、その葛藤を克明に描き出している。このアニメを見ている人たちは、自身の過去の恋愛経験を思い出し、胸を締め付けられる。

II. 恋愛は人との距離を縮めること

恋愛関係になるということは、物理的にも心理的にも相手との距離が非常に近くなることだと感じる。それはある意味、母子関係に近づくことのようにも思える。（カップルがイチャイチャすることもそれに当てはまるのだろう。）しかし、母子関係とは異なり、その関係が成立するかどうかは相手の思惑も関係する。相手が自分をどのように感じているのか、手探りで確かめていく作業が必要であり、相手の一挙手一投足に一喜一憂し、心が揺さぶられる。

「君に届け」は、何気ない高校の日常生活を描きながらも、主人公の心の揺れ動きを細やかに、繊細に描写している。それが、若者の心を惹きつける理由の一つと考えられるだろう。

そしてこの作品の主人公の黒沼爽子は風早くんと恋仲になる前に、彼女は小学時代から真っ黒な長髪と青白い肌という陰気な容姿から同級生に「貞子」と間違えられ、それからそのあだ名が定着し、周囲から恐れられていたことから確固とした友人関係が築けず、彼女自身も心の壁を作っていたように感じられる。まず、その心の揺れ動きから考えていきたい。

1. 風早くんとの出会い プロローグ

1) 肝だめしでの風早くんとの関わり

肝だめしで風早くんと爽子がふたりきりになり、言葉を交わしたのちにお互い沈黙になった時に爽子が感じた気持ち

急に 喋らなくなるから どうしていいのかわからない
…ところが めちゃくちゃになりそう
まるで生まれかわったみたいに 初めての気持ちばかり
…風早くんは 私に はじめてを たくさん くれるみたい

【考察】

爽子は風早くんと二人きりになる中で、陽性感情（好き、喜び、感謝など）を抱いたと考えられる。しかし、風早くんと出会って初めて感じたこの感情をどのように扱っていいかわからず、またその感情を自分が抱いていることを非常に怖がっていたと考えられる。これ以上親密になると、相手を傷つけてしまう、そして自分自身も傷ついてしまう、と無意識に感じたと思われる。それ故に、このときの爽子は当面、この距離感でいることを望んでいたと思われる。

→しかしその思いは肝だめしの結果発表で脆くも崩れてしまう。

2) 風早くんとの関係を周りから囃し立てられることでの葛藤

風早くんが罰ゲームを受けることになり、肝だめしで貞子（爽子）に迫られていたと周りから噂され、貞子と1週間つきあえる権を提案される。そのことに怒る風早くん。

風早「それが 罰ゲームなんて失礼すぎる 黒沼 女の子なのに …笑えない」

その言葉に周囲は

「風早、おまえ…… まさか ほんとに貞子の事好きなの…!？」

その言葉に揺り動かされる爽子 「風早くんの名誉が……！！」と感じ咄嗟に発言する

爽子「…誤解です。……たしかに私は、昨日 風早くんと一緒にいました。だけど、それは……何も特別なものではなくて…みんなも知っている通り誰にでも分け隔てなく接してくれる人だからです。……私が…風早くんの優しさや……爽やかさ 明るさ…正直さに……惹かれたのは事実で……それだけは……何の誤解もありません……」

そう言って礼儀正しく、教室を出ていく
この時同時に爽子は以下の様に思っている

……私 誤解の解き方…しってる 風早くんが 教えて くれたから
間違っ て なかったはず
きっと 誤解はとけたはず
嘘はひとつも なかったもの
本当のことを 言ったんだもの
きっと 風早くんの名誉は守れたはず

【考察】

このときの爽子にとって風早くんは「理想化された」良い対象と捉えられていたと考えられる。「1 週間つきあえる権」の経緯において、爽子は風早くんの名誉が傷つけられたと考えたが、それは同時に自身の理想化された良い対象が傷ついたことでもある。そして実際には、爽子自身もその言葉に様々な情緒を抱いたと考えられる。そこで風早くんを守る発言をし、自らの身を引くことで事態を収めようとしたと考えられる。

しかしそれは、自己愛的な殻に退避することであり、一度は近づいた風早くんとの関係性を壊してしまうことである。

→その後、爽子は自分が起こした言動は正しかったと言い聞かせるが、風早くんとはもう以前の様な関係には戻れないと感じると、爽子はさみしく感じる。

爽子は今までの傷つかないように距離を取るといふ、これまでとってきた防衛の仕方は、無意味であり、変えたいと感じ始めている。それが以下の思いに込められている。

……だけど…

やっぱりさみしい

夏休みが明けたら もう目も あわないかもしれない

みんなと同じように「おはよう」って

…笑ってくれないかもしれない

さけられるかもしれない

そんなの慣れていたつもりだったのに あんまり嬉しくて慣れなんて忘れちゃった。

風早くんに会う前の自分なんて もう 忘れちゃった…

そこで風早くんに出くわす

3) 風早くんとの再会

もう以前の関係には戻れないと爽子は感じていたが、学校に行く時に風早くんに遭遇する。そしてクラスの子達からの謝罪の気持ちとともにお詫びの品として、風早くんからクッキーが手渡される。それに爽子は感極まって泣く。

爽子「ありがとう……誤解とけたんだね…… かばってくれて わざわざ持って来てくれて 口きいてくれて……ありがとう」

風早「……あのおさ、多分…黒沼は おれのこと あんま わかってないと思うんだ。」

爽子「……気を遣わないで！ 風早くんの気持ちはちゃんとわかって…」

風早「…わかってないじゃん ……おれ 期待しちゃってもいんだよね？夏休みも黒沼に会えるって」

いつか いつか 君に届くだろうか

【考察】

ここでの二人の会話は、どこかぎこちなく、噛み合っていない印象を受ける。風早くんは爽子との距離を縮めようとしているのに対し、爽子は風早くんの真意を理解しようとせず、殻に閉じこもったような態度を取っている。風早くんは、誰に対しても優しく接する性格ゆえに、周囲から浮いている人は放っておかない。だからこそ爽子にも優しく接しているのではないかと、爽子は勘違いしている。つまり、爽子は自分自身が風早くんと同等の存在ではないと考え、彼を手の届かない憧れの存在として見ている。

「君に届け」というタイトルには、二つの意味合いが込められているように思える。一つは、爽子の想いが風早くんに届けという意味であり、もう一つは、爽子が憧れの存在である

風早くんと対等な関係にまで届けという意味である。

いずれにしても、「君に届け」を実現するためには、爽子が殻を破り、周囲との関係を深め、ひいては風早くんと心の距離をより縮めていくことが必要不可欠である。そして爽子自身も今後、徐々に風早くんを始め様々な人との距離を縮め、交友関係を形成していきたいと感じる様になっている。それは爽子自身が風早くんに自分の存在を受け入れられていると感じているからであろう。

2. 矢野あやのと吉田千鶴との友情

プロログで爽子は風早くんと距離感で揺れ動きながらも、徐々に関わられる様になり、まだ自分の思いが風早くんに届いていないと感じている。しかし一方で、風早くんが爽子にとって憧れの存在になり、彼女の心の中の良い対象となっている。そんな良い対象に支えられながら爽子は外的世界に触れていき、矢野や吉田と友人になり、そのことをきっかけにクラスの子達とも仲良くなっていく。しかしそこは一筋縄にはいかず、思春期ならではの葛藤や悩みを抱えながら、様々な困難に直面していく。

ここで再び Adolescence Process を取り上げる。

1) Adolescence Process に関して

二次性徴に前後して自分自身の心身に大変動が生じる。

潜伏期に一旦は収まっていたエディプス葛藤が再び起き、自身のこれまでのアイデンティティが揺らぎ、今までの社会的、家庭的秩序を揺さぶっていく。

潜伏期をひっくり返して、それまで慣れ親しんできた生き方を試される重要な時期。その中で誰もが喪失的感情を抱く（だからこそ第二の分離個体化）。

この年代の人々は具体的で白か黒かの考え方をする傾向にあると言われている（妄想分裂ポジション）。物事は正しいか間違っているか、素晴らしいかひどいかのどちらかであり、中間にはあまり余地がない。この段階では、若者が自己中心的で、自分自身を中心に考えるのは普通のことであり、この一環として、この年代の人々は、自分の外見について自意識過剰になり、常に仲間から判断されているように感じてしまう。

Adolescence Process の中で爽子の心は揺れ動き、周囲に対して非常に迫害的に捉えながらも一旦親しくなると、その相手（対象）を理想化とも思えるほど「夢のよう」と良い対象と捉えている。その中で爽子の心は混乱し、再び退避をしながらも風早くんを支えられながら人との距離を縮めていく。